

2004 年度生態史プロジェクト報告書

モノと情報班 B

ラオス南部のメコン流域における雨季から乾季移行期の漁具と漁撈 橋村 修（総合地球環境学研究所）

キーワード：ラオス南部、メコン川、漁具、魚類

調査期間・場所：2004 年 11 月 8 日～ 19 日、ラオス南部

A study of aquatic traditional material culture, fishing techniques and fishing in South Laos, Mekong tributarily

HASHIMURA, Osamu (RHIN)

Keywords: South Laos, Mekong River, Aquatic material culture, fishes

はじめに

本稿では、2004 年 11 月 9 日から 19 日までのラオス滞在中のうちの ICR 訪問や移動日を除く 4 日間程度で行ったラオス南部における雨季から乾季への移行期における魚類のサンプル採取補助と漁撈活動・漁具観察の調査内容を報告するものである。

調査地は、ビエンチャン市内、および周辺のノンサバン村、サバナケット周辺、パクセー周辺、コーンの滝周辺である。調査内容は、主として①漁具と漁撈に関する聞き取り、②魚類サンプル採取である。①に関して、ラオスの伝統漁具の総説については I U C N (IUCN 1997) の報告書において、網（タモ網、投網、敷網、刺網、待ち網、囲網）、罟、伏せ籠、釜、釣、罾などの機能について紹介が行われているが、漁具の地域差や漁具に対する観念や関連する語り については言及されていない。釜や伏せ籠については、そのミニチュアが、お守りとして、ラオスの都市部や村落内の店舗や乗り物などで飾られていることが多い。このように、漁具について福をためる機能や、あるいは質の転換の機能というような意味も含めながら、漁具の社会的位置づけについて再考する必要がある。なお、後藤明は本プロジェクト調査（モノと情報班）でラオス北部の雨季の釜について調査・研究をおこなっているので、釜の問題については後藤論文を参照されたい。

本調査では、これまでのラオス研究であまり取り上げられてこなかった漁撈・漁具のうち、産卵場の機能を持つ集魚装置＝柴漬漁業（フン・ダッパー）に注目した。柴漬けを取り上げる理由としては、その産卵場という機能に注目することで、魚類の行動の一端を解明することがあげられる。この問題は、②の魚類のサンプル採取調査とも関係する。今回の調査期間中は、調査先でメコン川流域の魚類の行動範囲を把握するために魚類や水のサンプル採取も行なった。他に貝、カニ、エビも採取した。魚類や貝・カニ、エビ、水を採取するのは、魚の同位体分析を行ない、魚のトレサビリティを知るためである。こうした手法を用いることで、例えば、採取地点（メコン川、支流河川、水田周辺）によってとれる魚の種類が異なるのか、採取した魚がどの範囲を回遊するのか、解明できる可能性がある。なお、採取データは現在作成中で、今後の調査を通じて完成を期す予定である。本稿では、まず、柴漬漁業の研究史について日本国内の事例にも言及しながら紹介し、柴漬および釜などの漁具についての調査内容について報告していく。

1、日本列島とアジアにおける柴漬漁

東南アジアの柴漬漁業は、内水面と海水面に広く展開し、特に海水面の柴漬けについては東南アジア各国の漁具事典 (Kedua 1989) や北窓の研究などで詳細に紹介されている (北窓 2000)。また内水面の柴漬けについても、水田漁撈の観点から、東南アジア各地の自然環境に応じた存在形態が言及されている。(石毛・ラドル 1990)

日本列島の沿岸域や内水面においても、柴漬や漬木などの集魚装置を用いた漁業（以下では集魚装置漁業の呼

称を用いる)が、最近まで数多く行なわれていた。『日本水産捕採誌』では、集魚装置を用いた漁業について、簾罾類の簾に沖波瀬、罾類にキリコミ、固笊(ど)、築磯、株渴水、篠漬、烏賊柴、亀孕漬、鱮(シイラ)漬をあげている(農商務省水産局 1929)。明治 23 年『熊本県漁業誌』をみると、集魚装置としての機能を持つ漁法として、波瀬場、桶漬け、漬籠、烏賊籠が挙げられ、それらの多くは、柴漬け漁で、雑漁具の項目に出てくる(熊本県 1890)。

国内の集魚装置漁業については、琵琶湖(中川 1988)や河北潟、福井芦原の北潟、四万十川(内田 1997)(野本 1999)、鹿児島(川野 1991)などの内水面の事例を中心に紹介されてきた)。福井県の芦原町の北潟では、毎年 12 月 1 日に寒鰯の「柴漬漁」が解禁となり 3 月まで行われ、冬の風物詩となっているという。石川県河北潟ではあらかじめクリ、ナラなどの枝約 300 本を束ねたものを水中に沈めておいて、隠れ家として集まってくる魚を一網打尽にする「根掛杓漬」と呼ばれる柴漬漁があった。印旛沼ではテナガエビを捕るための柴漬漁があった。

琵琶湖の柴漬漁は、「ネヤ」とも呼ばれ、主として内湖で行われ、その起源は平安期までさかのぼるとされる。柴木を水中に漬けること 1 年、「そぶ」と呼ぶ水あかが柴につき、赤むしなどがわくと魚はここをすみかとし、さらに 2, 3 年たって魚にとって最適な環境となると、冬になり寒くなる時季に魚は柴に入り込む。そこに正月などの需要を見込んで、年に一度だけ漁に出るという。柴の周りを簀で囲み、柴木を上げ、ついで投網をうって魚をとった。明治 30(1897)年には琵琶湖全体で 363 の柴漬が存在し、その水揚げ量で市場の値が下がるほどだったという(中川 1988)。また、四万十川の柴漬漁は、樹の枝や笹を使って人工的に川魚の住家を作り、それに潜り込んだウナギやエビなどを捕まえる漁法であった。

他方、有明海のイカ籠漁、亜熱帯性回游魚を集魚、捕漁する際に用いたシイラ漬と呼ばれる漬木漁(橋村 2005)などのような、いわゆる海の柴漬漁も広く存在していた。

このように、柴漬け漁業に関しては、東南アジアから日本列島にかけての広い範囲で行われていたのである。この報告では、そうした成果を踏まえつつ、ラオス南部地域における柴漬漁業を中心に、罾漁、築魚、網漁などの観察と聞き取り成果を報告するものである。

2、調査地の生業暦

調査地のひとつ、ビエンチャン市内のノンサバンにおいて、タムバン・ブンマン(82 歳)、カムチャン(78 歳)たちに話を伺った。当地の生業暦は次のようになる。旧暦 3 月のカオクライ(カオクラオ)は、牛を殺して行われる収穫祭である。参加者は金持ちに限られている。これは、米を売る前に米の恵みを得るための収穫祭としての意味を持っていた。3 月に田植えを行う。そして、5 月から 6 月に収穫する。この 4 ヶ月間の作業をナーセンという。次は 6 月に種まきをして 7 月に田植えを行い、10 月 11 月に収穫する。これをナーピーという。この秋の収穫後にお酒を飲み、白い糸を手首にまく。魂のことをコアンという。

魚は、1 年中様々な種類がとれる。とりわけ 11 月は魚の最も多い月である。魚が最も多いのは雨季から乾季に切り替わる時期で、この時期は産卵期にあたっている。魚は卵を産むために戻って来て、産みおわると川に戻る。魚の産卵場をフンダッパーと呼ばれた。バレーという魚は、2 日くらい煮干にして 1 ヶ月持たせた。バーカーは市場(ターライホエクア市場)へ出した。釣り棹のことをペットパッケと呼んでいる。

3、ラオス南部の柴漬漁

今回の調査では、柴漬漁業の装置をメコン本流とその支流および水田周辺で確認した。

支流のビエンチャン郊外のノンサバンでは、柴漬け漁業をフンダッパー(フォンダッパー)と呼ばれていた。この装置には次の 2 つの役割があった。まず、回游魚の産卵機能を利用した集魚装置としての役割である。次に、他人に投網をさせないための「なわばり」の役割である。

利用期間は、支流や水田周辺で通年の利用、本流での乾季の利



ノンサバンにおけるメコン川支流の柴漬。

用というような違いがあった。まず、支流や水田付近の集魚装置フンダッパをみる。これらは支流、水田周辺に多く存在していた。

今回の 11 月中旬に訪問した際に、フォン・ダッパの枝の交換作業をやっていた。元の柴を取り除いた後に、盛り土で囲いを作って、数本の棒を立てて、仕切りを作っていた。聞き取りによると、個人個人がその持ち主となっていて、その場所（範囲）の権利を持っているとのことである。つまり、所有権が存在し、個人所有物であった。この水路には、漬け柴が約 50 ～ 60 程度存在していた。枝の間に魚が住む柴漬で、一年中入っていた。漬木に用いる枝の種類に関しては、特に何がいいという情報は得られなかった。漬け芝の周囲に網を張ってとっていた。柴漬の枝の交換は、乾季の水の少ない時期に 1 週間以上かけて行った。

4、小型の筥

小型筥はサイと呼ばれ、乾季⇄雨季移行期に用いられた。乾季で水が引く季節には、水溜りや人工池などに逃げ遅れた魚がいて、それをとる作業を行った。6－7 月の雨季への変わり目と 10 月 11 月の雨季から乾季への変わり目に用いた。魚が川から水田に動くのは 6 月から 7 月で、11 月には川へ下る。これらのサイは水田で使った。洪水になってから水田の注ぎ口において、バーコー（ナマズ）、エビ（クン）、バーカオ ノイ（家に持ち帰るのがほとんど）などが入った。大抵は自家消費であったが、市場に持っていくことも時々あった。ドジョウやテラピアなども入った。その他に、双方向 2 箇所に入りのあるサイもあり、これは上下する魚が入れるのに便利だった。ブンナンさんの家の表には、竹製のサイが 4 本あった。概ね、長さは約 113 cm で直径約 25 cm であった。蓋はココナッツの皮製であったが、最近はプラスチックに変わりつつある。

これらの漁具は、温帯の干潟に多い干満差を利用した漁法とも共通している部分が多い。こうした乾季雨季の明瞭に分かれる世界と、干潟世界との比較も課題である。

5、雨季専用の漁具－大型筥

ここでは、雨季専用の大型の筥について検討する。



メコン本流の柴漬 ビエンチャンにて



漁具は部分的に竹から金属、プラスチック、またはナイロンへと変化するものがみられる。しかし、漁具全体が、竹から他の用材に変化する傾向にはなっておらず、竹主体の漁具生産と利用は今後とも続いている。漁具の変遷史についても、新規の漁具がどこから流入したのかという点も含めて触れていく。

ノンサバンのブンナンさん宅の奥の納屋には、金具ないしナイロン糸を用いて作った大型漁具があった。これらの大型漁具を今年は使っていないという。約 20 年前から、雨季の最盛期の水の多いときに使い始めたという。これら漁具は、3 種ほどに区分できる。

ロopp。パーカデュードをとるための漁具。プア（柵）と一緒に使う漁業をローpp という。魚の入り口は両側に存在する。最近、丈夫にするために鉄製にした。しかし、上の部分は竹製である。鉄が足りないから竹にしたという説明であるが、金具の部分よりも網目が大きいのでそれなりの意味があるのではないと思われる。この網目は、漁具内に空気を送る意味があるのではないかとのこと。彼らは真中に突出した「煙突」が魚の呼吸用の意味を持つと話していた。ラオス北部でみられるコーン（魚籠）の上部の網目が粗いのも、こうした点と共通するのではないかと想像される。長さ 90cm、直径 25cm、突出 55cm。

サイ。これらの大きな釜は、水の最も多い雨季に用いた。10 度位の角度におく。サイを斜めに置くと魚は死なないと言われ、平らにおくと死ぬ魚が多かった。ナイロン製になったのは約 5 年前からである。長さ 70cm、口径 30 cm、小口径 15 cm。魚（パームマン）をおびき寄せるために釜の内部にミミズやありの卵（モッデイ）を入れるものだった。今年の雨季は水が少なかったため、これらの漁具の出番はなかったそうである。サイナムとは魚籠型の釜で、上半部の粗い目を特徴とする。これは北部の一部の民族に



しか見られない。このように雨季最盛期と乾季と雨季の移行期では異なる漁具を使っているのである。

6、 築

コーンの滝で巨大な築を観察した。乾季で築が浮かび上がっていたためその構造をよく理解できた。滝の下側の流の淵では投網が行われていた。

その他に、メコン支流にあった築（リー）の調査も行い、概ね雨季に利用する点、雨季と乾季で場所をずらす点、雨季の水量の多い段階ではかえしの付かないサイを据え付ける点などを確認した。また、築の内部にサイやフォンチャ（大型）をすえつけていた。

網（ヘー（cast net）投網）については、投網とヘーブオンと呼ばれるライギョ用の網について調査した。後者は錘の先にさらに返し網が付いているのを特徴とする。

ノンサバンの投網は、腕（ラオ）8 つ分の長さがある。錘は鉄製でタイ製である。網は自分たちで作った。出来るだけ





重いほうがいい。大きさは3サイズで小中大であった。今は息子さんがやっている。水のあるときは、入りこんででもやる。(モンゴミー) 川の真中まで船を使っていた。網は川の中の瓶やごみによくひっかかるので網はたくさん持っている。網のナイロンは自家製であるが、ナイロン網が入ったのは10年以上前で、元々の網の原材料は水牛の一番硬い部分のイエンと呼ばれる筋肉の部分を使っていた。その後、木綿となり、そしてナイロンになった。水牛のエン(イエン)はナイロンよりも丈夫であった。

プア(柵)(pheuak) Bamboo Fence 投網をする場所に建てる。囲んで魚を逃がさないためにやる。約20年前から始めた。今でもつかっている。これは、投網をする場所にはる。魚を逃がさないために、長さは約3mで、竹串状(刺網的な役割を持つ?)になっている。その下にサイをおく。4年くらい使ったら新しいプアに代える。高さ3m×1m。魚が入ってから柵で囲むような漁法をフン、(フォン) フムという。フムとは囲むという意味である。

ビエンチャン市内の竹道具の販売店で売られている漁具について、ビエンチャン市内の竹道具の店ヘインタビュを行った。それによると、漁具は、歩いて売りに来る行商人から買っているという。彼らはビエンチャンの北、約20キロ離れているホーシアン村、ナークイ村、ナノー村の人たちで、それらの村で漁具を作っているとのことである。伏せ籠(スン)は2万K Pした。

7、小結——雨季から乾季移行期漁撈と干潟漁撈

上述してきたように、今回は、雨季から乾季への移行期における漁具の利用や魚類について調査を行った。柴漬けの利用のあり方や、とれる魚の種類については、小河川、中河川、メコン本流、水田などという川の種類や規模や水界のあり方の違いで、異なる傾向にある。こうした問題について、今後とも検討を深める必要がある。また、笠(サイ)は、その全体を竹で使用する形態から、部分的に金属やナイロンを利用する形へと変化する傾向があった。但し、どうしても竹を使う部位が存在していた。網については、木綿などからナイロンへの変化が、ここ約15年の間に進んだ。また、捕れる魚には、変化があった。このような10年から20年のタイムスパンにおける自然と人間との関わりの変遷史について、今後ともおさえる必要がある。

今後の課題としては、季節の違いと漁具の利用のあり方の差異について検討することがあげられる。また、今回の調査で特に痛感したのが、乾季と雨季の漁具と、干満差のある干潟周辺の漁撈(漁具)との共通性であった。すなわち、乾季雨季の漁撈文化と干潟漁撈文化との共通性について、「干潮 ⇄ 乾季 ≠ 満潮 ⇄ 雨季」

の枠組みで考えていく必要がある。例えば、メコン流域と有明海との間の漁撈文化、漁具・漁法、漁場利用システムなどの比較も、アジア・モンスーンにおける地域生態を考えていく上での重要な検討課題となり得る。

文献

農商務省水産局

1929『日本水産捕採誌』

熊本県農商務課

1890『熊本県漁業誌』

中川真澄

1988「近江の柴漬漁」滋賀文化財教室 102（合冊 3 所収）。

Kedua

1989 PERALATAN MENANGKAP IKAN DI MALAYSIA. Jabatan Perikanan.15-32 頁。

石毛直道、ケネス・ラドル

1990『魚醤とナレズシの研究—モンスーン・アジアの食事文化』岩波書店、383 頁。

川野和昭

1991「柴漬漁」（鹿児島民具学会編『かごしまの民具』慶友社、206－207 頁）

I U C N

1997 COMMUNITY FISHERIES IN LAO PDR : A SURVEY OF TECHNIQUES AND ISSUES.70 頁。

内田圭一、東海正

1997「高知県四万十川河口域における柴漬漁について」CANCER 6, 27－31 頁。

野本寛一

1999『四万十川民俗誌』雄山閣、278 頁。

後藤 明

1999『物言う魚たち』小学館、270 頁。

北窓時男

2000『地域漁業の社会と生態：海域東南アジアの漁民像を求めて』コモンズ, 318p

山下義満

「烏賊籠漁」『熊本県文化財通信』

橋村 修

2005「明治期における回游魚漁業の地域差—シイラ漁業を事例に—」『國學院大學考古学資料館紀要』21, 273－291 頁。

1) 魚の神話や語りについては（後藤 1999）を参照されたい。

2) 河北潟、芦原北潟、四万十川の柴漬漁に関しては役所や観光協会作成のホームページが参考になる。例えば芦原は以下の HP である。http://www.ideyu.gr.jp/koryu/utu_awa.html